

被災地の現状と調査の視点を探る

— 鑑定人はいかに動いたか — (上)

震度7を2回記録した熊本地震。多くの木造住宅が2度の強い揺れに耐え切れず倒壊した。特に、益城町周辺では押しつぶされて屋根だけが残る惨状も至る所で見受けられる。損保協会によれば、熊本地震による地震保険金支払額は約3285億円(6月27日現在)となっている。保険金支払いに向けたスピーディーな対応が求められる中、損保鑑定人はいかに動いたのか。今回、地震保険の調査で現地に入った日本アイラック(東京都新宿区、国原秀則社長)の協力を得て、鑑定人の資格を持つ一級建築士の渡邊雅治氏に同行。被災地の現状と鑑定業務の対応を振り返った。

小雨の益城町へ

地震から約2カ月後の6月19日、損害が一部残

る熊本空港を後に、渡邊氏はタクシーで益城町へと入った。天候は小雨。道案内を務めてくれたのは、地元で長年、個人タクシーを経営し、幾度も地震保険の鑑定調査をドライバーの

記者の視点から

熊本地震 第2弾

一般的に地元のタクシーやレンタカーを使うことが多く、慣れない土地をレンタカーで回るのは通行止めなどの制約もあってナビ通りにいかないうち、事故を起こすリスクもある。また、契約者



①この地域では、竹を縄で縫った木舞(小舞)を柱と梁の間に入れ下地を作り、土を塗り、しっくいにて仕上げた土壁の住宅も多い。筋交いはなく、地震の揺れに対しては弱い。②1階部分が座屈した住宅③全壊となった商店



④1階部分が座屈した住宅⑤波打つ路面

年齢、ライフスタイル異なる契約者

「被災者に寄り添う調査を」

日本アイラック鑑定人一級建築士 渡邊雅治氏

の住所が古く、ナベの住所が合わないというケースもある。地元のタクシーであれば30分程度で到着できる現場に、1時間

の強い揺れで済み、負荷に耐えられず、一気に建物が崩れたようだと分析する。台風災害に備えるために重く造られた構

適量をしっかりと。量より質の鑑定を

日本アイラックでは地震後の4月17日に第1陣が被災地に到着。渡邊氏自身も24日に熊本入りし、その後、ホテルを転々としながら現地にとまっています。鑑定業務の流れは、契約者からの事故受けに基づき、保険会社が書類などを作成して鑑定人チームに渡す。保険会社が契約者への訪問日時を確定する場合もある。鑑定人自身が直接アポ取りをするケースも

成の時間が必要になることから、1日4件程度が理想的だと指摘。「鑑定人のこころで書類が滞ってしまえば、結局、契約者への保険金支払いが遅れてしまいかねない。食べ物も、口の中にくさって飲み込みもできず、入浴もできず、トイレも使えない。被災者が寄り添うような調査を心掛けて」と言う。

一方、家財の鑑定は時間が経過するほど調査は難しくなる。被災者は室内を片付け始めるため、壊れたものを処分したり、新たな生活道具を購入したりして、損害の程度が不明確となるからだ。そうした場合でも、細かくヒアリング調査を行って記録に残したり、被害のあった場所などを指差してもらったりなどエビデンスとして残せる写真を撮ることが重要だと指摘する。鑑定資料を第三者が見たときに、被害をイメージできる資料の作成が欠かせないという。

熊本地震を鑑定人の立場から振り返ると、拠点となる市内が被害を受けたことの影響が大きいと渡邊氏は述べている。態勢を整えるための時間と場所の確保に手間取り、当初ワンルームに9人が入って作業する状況が続いたという。このことは、他の都市で直下地震が発生したような場合にも、同様の状況を招くことが想定できる。

度目となった。今回は、前回訪問できなかった益城町山地区を中心に見て回った。甚大な被害が発生した熊本地震でも、この地域が最も大きな損害を被っている。至る所に押しつぶされて屋根だけとなった住宅が残る。鑑定人の渡邊氏は被害が大きいこの地域の特徴として、「台風が多い土地柄だけに、強風吹き飛ばされやすい屋根材に重い瓦を使い、土壁で仕上げた住宅が多い。建物を支える木材も30年、40年たった家賃と自然劣化もある。柱と梁(はり)の接合が幾度も

造が、今回の地震では大きなマイナスに作用した。調査は1日3、4件、多いケースでは1日10件ほどに達したという。しかし、渡邊氏は、数が多いだけではよいとは言えないと指摘する。熊本地震では、契約者は避難所で生活し、調査する物件にいないケースも多い。鑑定で現場を訪れても契約者がおらず、携帯電話をかけて避難先を確認し、迎えに行つて再度現場に戻り調査を開始。調査が終了すれば、再び避難所へと送り届ける。そうしたことの繰り返しだったと振り返る。

また、調査後の書類作

(記者・森隆/防災士)

被災地の現状と調査の視点を探る

— 鑑定人はいかに動いたか — (下)

熊本地震では、市内のRC（鉄筋コンクリート）造マンションやビルなども損壊しており、地震力の凄まじさをあらためて思い知らされる。今回は鑑定に当たった渡邊雅治氏（日本アイフラック鑑定人・一級建築士）と契約者とのやりとりの中から見えてきた課題などを含めて考察したい。依然として、地震保険を火災保険同様に実損でん補の保険だと思いい、見積書を手渡す契約者もいる。一方、一級建築士として被災契約者から、現在の住宅に今後、住み続けられるのかといった相談を受けることもある。これらの状況は、鑑定人が単に地震保険の調査だけにとどまらない事実を示している。

一部のマンションでせん断破壊
RCの建物の被害はそれほど多いとは言えないが、深刻な損害を受け、全壊となったケースもあ

記者の視点から

熊本地震 第2弾

建設後30年から40年力の集中が起きて、せん断ねじれを起しているマンションでは、5階と分析する。また、柱脚部分に甚大な損壊を受け全壊となっている。写真。渡邊氏は「RC建物の柱が圧縮と引張りを繰り返されるために割れて飛び散り、鉄筋がむき出しになる。す



①5階部分の柱脚が損壊し、全壊となったマンション。②傾斜して解体が始まったビル



③石垣が崩れた熊本城④つぶれた車

チャットつぶれてしまき、4階の医院の診療台と解説する。柱に残されたバツ印のような痕跡が、その証しだとい

一部契約者に地震保険の理解不足

建物の相談受けることも

また、同様に、市内の物と家財で被害状況が大きく異なるケースもある。建物の共用部分が一

契約者はすぐに納得するの、再度、渡邊氏に聞いた。「俺は知らない。ふざけるな、帰れ」「そんな保険、役に立たないじゃないか」と言う人。「加入時に説明を受けていない」と主張する人もいた。鑑定人の態度や話し方が悪いのと訴えられ、鑑定人が悪者にされる可能性もあると対応の難しさを指摘

一方、明らかな半損でありながら全損ではないかと主張する契約者もいる。そうしたケースでも、「あれほどの揺れを経験しているだけに、結果に納得したくない場合、再度、一緒に歩いて確認することになっている。そうしたこと納得してもらえない人もいます」と言う。

現場での対応の難しさを指摘

契約者は地震保険を理

また、最近SNSで再鑑定をある表現が見られることもある。「私はこうやって半損にした」「すぐに結果に納得せずしつこく再鑑定を依頼した方がいい」と投稿されるケースもあるという。的確な査定は保険の

現場での作業を人間の掛

一般的に火災保険と同じように思っている契約者も結構いると指摘した。そうしたことから、鑑定に行く際には地震保険のパンフレットを持参し、地震保険の支払い方法の説明から行うこともあ

渡邊氏は一部損、半損、全損が明らかに判明している場合、鑑定結果はその場で契約者に伝える。損害が一部損か半損か微妙な契約者には、もっと他に損害はないか念を押す。損害の確に

契約者宅で修繕業者の修

鑑定人が単に地震保険の調査だけにとどまらない事実を示している。

根幹に関わることだけから、被災者に寄り添いながらもしっかりとした対応が求められることは言うまでもない。

答えて、契約者が不安を解消していただければいい」と言う。日本アイフラックの国原秀則社長も「半損の住宅は修理した方がよいのか、建て直した方がよいのか、微妙な壊れ方もある。被災者の不安に親身に応えようとする、すぐに1時間や1時間半はたつてしま」と語る。熊本の地震保険付帯率は約60%と全国平均より幾分高く、すでに地震保険で生活再建に取り組んでいる被災者もいる。地震後、家族が実家へ避難して別居している契約者からは、「保険で住宅が直せるから妻と子どもを迎えに行くことができるといふ家族もいた。また、今回、道案内を義務めたタクシードライバーの井上鉄也氏も住宅が全損となった。井上氏は昨年10月、火災保険の契約更改時に代理店に勧められて地震保険に加入したという。「保険がなく、すべてがゼロだと思っただら憂鬱（ゆううつ）になっていた。今は、まったく落ち込んでいない。保険を勧めたくれた方々に足を向けて寝られない」と述べた。

熊本地方は地震後、豪雨にも見舞われている。ブルーシートの隙間からは雨も漏る。今後は台風シーズンも控えているだけに、複合災害にも注意を要する。

（記者・森隆／防災士）